

開会のあいさつ

磯谷 桂介（文部科学省研究開発局地震調査研究課長）

日本に住む我々が直面しなければならない課題は、大地震の被害をどう軽減するかということである。8年前の阪神・淡路大震災で得られた教訓として、ボランティアの参加のあり方、消防・自衛隊の救援のあり方、公助と共助、罹災直後の身の守り方などが指摘されている。

その中で、本日強調したいのは、当時は、大地震に対するイメージを持っていなかったのではないかということである。日本では過去に何度も大きな地震が起きているが、現在の科学技術水準では一般的に地震予知が難しいといわれている。その中でどのようにして地震に立ち向かうのか。地震発生は不確実性が高い現象ではあるが、できるだけ地震の「イメージ」を求めていく必要がある。

阪神・淡路大震災を契機に、議員立法で地震調査研究推進本部ができた。全国の基盤的な観測網の整備が進み、地方公共団体の協力で活断層調査や地下構造調査も進んだ。また、本日のメインの話題である地震動予測地図を作る活動も進められている。

これまでの地震調査研究のさまざまな活動を踏まえ、平成11年度からこのワークショップを開いている。最初のテーマは、地震調査研究と防災工学の連携だったが、教育、啓蒙、普及、広報の必要性も指摘され、昨年からは社会科学との連携も加えた。そのことは地震調査委員会の活動にも活かしている。

本日のワークショップはこれまでの成果を踏まえ、より広い分野の連携も考えての意見交換を行いたい。そのために地震動予測地図の作成、利用に関し理学、工学の学識経験者や地方公共団体の担当者、実務で利用される立場の方にも参加いただいて、地図の利用について探っていただくようプログラムを組んだ。

それぞれの人が持つ地震のイメージについては、職業や立場、専門知識の多少などによりいろいろなレベルがある。その中で地震動予測地図は、地震の「イメージ」を持ってもらうための、最初の基礎的な情報として活用してもらえればよいと思っている。見知らぬ土地でも地図があればそこからイメージを持つことができる。地震動予測地図は防災への第一歩となる地図として捉えていただければと考えている。